Nuclear Weapon & Nuclear Test MONITOR

核兵器・核実験モニター

号外
08/1/1

毎月2回1日、15日発行
1996年4月23日
第三種郵便物認可

軍事力によらない安全保障体制の構築をめざして

発行■ＮＰＯ法人ピースデポ
223－0062　横浜市港北区日吉本町1-30-27-4 日吉グリューネ1F
Tel 045-563-5101　Fax 045-563-9907　e-mail:office@peacedepot.org　URL:http://www.peacedepot.org
編集責任者■梅林宏道　製作責任者■田巻一彦　郵便振替口座■00250-1-41182「特定非営利活動法人ピースデポ」
銀行口座■横浜銀行 日吉支店 普通1561710「特定非営利活動法人ピースデポ」

非武装地帯（DMZ）平和賞受賞報告

「北東アジア非核兵器地帯」設立への励み

受賞の知らせ

福岡市にある韓国江原道（カンウォンド）観光事務所から、2007年11月7日、次のようなFAXが舞い込んだ。それが嬉しい騒動の始まりであった。

NPO法人ピースデポ
代表　梅林宏道　様　　大韓民国江原道庁
日本観光事務所

2007 DMZ平和賞　受賞について

拝啓　時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素は日韓観光文化交流につきましては、ご理解とご協力を賜り衷心よりお礼申し上げます。

さて、弊道が平和活動に寄与した個人・団体を対象に毎年授与する「DMZ平和賞」につきまして、2007年の特別賞を貴団体へ授与いたしますことをご連絡いたします。

つきましては、以下の通り受賞式を執り行いますので、ご多忙中とは存じますが、ご参加いただけますよう、よろしくご高配のほどお願いいたします。

末筆ながら、皆様のますますのご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。　敬具

第3回DMZ平和賞
特別賞　ピースデポ
世界平和と朝鮮半島の再統一のための尽力と貢献を多とするとともに感謝し、ここに江原道及び江原日報は第3回DMZ平和賞特別賞を授与します。
2007年11月29日
江原道知事　江原日報社主

もう忘れるほど長い前に、「東北アジア非核兵器地帯」設立のために共に行動してきた韓国の「平和ネットワーク」から、自治体の平和賞に推薦するのでピースデポのホームページには出ていない梅林の業績リストを送るように依頼されたことがあった。しかし、そのこととこのFAXとが頭の中で結びつくのにしばらく時間がかかった。

それから勉強が始まった。江原道を地図で確かめた。確かに朝鮮民主主義共和国（北朝鮮）にも江原道がある。世界で唯一の分断道であることを知った。江原道が鳥取県と姉妹関係を結んでいることも知った。道都チュンチョン（春川）が、「冬のソナタ」のロケ地として日本の観光客が押しかけている場所であることも初めて知った。「DMZ平和賞」についても勉強した。賞は、道と「江原日報」が主催するものであった。

長いドライブのあとチョロン（鉄原）につくと「第3回DMZ平和賞授賞式場」という道路標識が見えてホッと一息。（07年11月29日。撮影：塚田晋一郎）

式場となった江原道チョロン（鉄原）郡庁舎の正面。会場は3階のホール。（07年11月29日。撮影：塚田晋一郎）

受賞理由など、公式文書を入手するのにはしばらく時間がかかった、最終的に報道資料として発表されたものの抜粋訳を4ページに掲載する。

受賞式には、梅林宏道とインターンの塚田晋一郎の2人が参加することになった。

授与式の報告

11月28日夕方、梅林と塚田が金浦空港に着くと、江原道庁観光政策課から日本語ができる付き添いのファン・ジョンスク（黄貞淑）さんと道庁の運転手との2人が迎えに来ていた。2人は以後、私たちのお抱えチームとしてたいへん親切に世話をしてくれた。

受賞挨拶

東北アジア 非核兵器地帯の意義

2007年11月29日
梅林宏道（日本国NPO法人ピースデポ代表）

私たちNPO法人ピースデポに2007年DMZ平和賞特別賞を授与して下さった江原道並びに江原日報の皆さまに心からお礼申し上げます。

私たちにとってこの受賞は特別の喜びであります。日本の一市民として、いま私が立っているこの江原道の分断に、日本が責任を負っていることを忘れてはならないと思います。そのことを肝に銘じつつ、分断地帯を平和の発信源に転換しようというDMZ平和賞の大きな志の中に私たちを加えていただいたことを、心から感謝し、嬉しく思います。

第一に、私たちピースデポは、ここ10年間、東北アジア非核兵器地帯を設立しようという提案をして、韓国の平和市民団体とともに精力的な市民活動を重ねて参りましたが、それが認められたという喜びがあります。このことについては、後ほど詳しく申し上げます。

第二に、日本の中に、アジアで犯した日本の過ちの歴史を直視せず、歪め、美化し、軍事化を強めようとする危険な流れがあります。ピースデポの「デポ」というのは、物資を集積し配送する集配拠点を意味しますが、ピースデポは反核・平和に関する正確な情報、資料、分析を集積し内外に発信することを通して、このような日本の危険な流れを止めようと努力して来ました。今回の受賞は、そのような私たちの新しいスタイルの平和活動の意義を、韓国においても認識して頂いたことを意味し、身を引き締める思いを抱くとともに、特別の喜びを感じます。

第三に、私の個人的な思いになりますが、平和運動に約40年関わってきた中で、私は韓国の民衆運動と民衆思想に強く感銘を受け、励まされて参りました。とりわけ、軍事政権に抗して立ち上がった70年代、80年代の民主化運動に連帯して、私は軍事政権を助ける日本の政策に反対する運動に加わり、韓国の敬愛する多くの有名、無名の人士と交わり、影響されてきました。その意味で、今回の受賞の喜びに特別の感慨が加わります。

このような受賞の喜びがさらに大きな実りにつながることを希望して、東北アジア非核兵器地帯を設立することの意義について、少し詳しく申し述べたいと思います。

現在、朝鮮半島の非核化を目指して6か国協議が行われていることは、皆さんもご承知の通りです。そこには、韓国、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、日本、中国、米国、ロシアの6か国が参加しています。6か国協議が私たちの平和にとって極めて重要な会議であり、成功することを切に願うことは言うまでもありません。しかし、朝鮮半島から少しレンズを引いて、その周辺を含めた東北アジア地域の平和へと視野を広げたとき、朝鮮半島（韓半島）の非核化だけでは不十分であると気が付くのではないでしょうか。朝鮮半島の非核化が合意された後にも、日本と南北朝鮮、日本と中国、中国と米国など東北アジアの諸国間の軍事的緊張は複雑に交錯しながら継続すると考えなければなりません。しかも、それは核兵器の変わらぬ脅威に満ちた緊張であります。

壇上に並んだ受賞者。右からクォン・キュンスル、ブルース・ブエノ・デ・メスキタ、梅林宏道。（07年11月29日。撮影：塚田晋一郎）

ピースデポから感謝の意を込めて出版物セットを江原道と江原日報に贈呈。立っている左から江原日報社長、江原道知事、梅林。（07年11月29日。撮影：塚田晋一郎）

一行は車で宿泊地の道都チュンチョンに向かったが、ソウル近辺の渋滞がひどく2時間位掛かって夜遅くにチュンチョン・セジョン（世宗）ホテルに着いた。

29日、朝8時半ホテル出発で授与式のあるチョロン（鉄原）郡庁へ車で移動。僅かに雪が残る山間の長い道をひたすら1時間半ほど北に走った。郡庁は、非武装地帯から約13キロの地点にあった。

郡庁に着くと郡主の出迎えがあり、やがて知事、江原日報社長、受賞者（大賞の代表者＝クォン・キュンスル、学術賞＝ブルース・ブエノ・デ・メスキタ、特別賞の代表者＝梅林宏道）がお茶を

すなわち、日本では、北朝鮮の核兵器と同様に、中国の核兵器への脅威が日本の軍事力強化と日米軍事同盟強化の理由として掲げられてきました。北朝鮮や韓国では、日本の核武装への懸念が常に問題にされております。とりわけ、民生利用のためとはいえ、日本が核兵器の原料にもなりうるプルトニウムの生産や蓄積を続けていることが、そのような懸念の原因となっています。中国は、米国の核兵器が中国を標的としており、日本や韓国が基地を提供して米国の核戦略を支援していると警戒し対抗措置を講じています。それが、日本に跳ね返って日本が軍拡をする悪循環を生み出しています。これらは、朝鮮半島の非核化が合意された後にも継続すると考えられます。このような相互の不信と警戒感の連鎖を、国境を越えた平和を求める市民の知恵と行動で断ち切りたいというのが、「東北アジア非核兵器地帯」設立を求める私たちの考えの原点です。

非核兵器地帯の考えは、けっして理想論ではありません。世界にはすでに国際条約によって5つの非核兵器地帯が存在しています。歴史的に古い順に数えますと、ラテンアメリカ・カリブ地域非核兵器地帯、南太平洋非核地帯、東南アジア非核兵器地帯、アフリカ非核兵器地帯、中央アジア非核兵器地帯の5つです。最後の中央アジア非核兵器地帯は昨年9月にできたばかりです。5つの条約と南極条約によって、現在、南半球の陸地のほぼ全部が非核兵器地帯になっています。モンゴルが国連総会で非核地位を獲得したことを加えると、世界の109か国が非核地帯に属しています。

すべての非核兵器地帯には3つの重要な共通要素があります。（1）核兵器の製造、取得、配備などを禁止していること（核兵器の不存在）、（2）非核地帯への核攻撃や核攻撃の威嚇を禁止していること（消極的安全保証）、（3）条約が遵守されていることを検証する機関を設置すること（条約遵守・検証機構）。この（2）にとりわけ注目していただきたいと思います。つまり、非核兵器地帯とは、核兵器が存在しない地帯であるだけではなくて、核攻撃も核の脅しも禁じられている地帯なのです。

私たちは、東北アジア地域こそ、非核兵器地帯を作ることによって大きな恩恵を受ける地域であると考えました。そして、3+3（スリー・プラス・スリー）の構造を持つ6か国の非核兵器地帯条約を提案しました。それは、日本と南北朝鮮の3か国が地理的な非核兵器地帯を形成し、中国、米国、ロシアの3か国が、その地帯への核攻撃や脅しをしない義務を負う、という条約です。これによって日本は北朝鮮や中国の核の脅威を理由に軍事力を強化したり、日米軍事協力を強化する必要がなくなるはずです。南北朝鮮は日本の核武装への懸念を解消することができますし、米軍に日本を押さえる役割を期待する必要も低下します。この地域における米軍の役割が低下すれば、米中の地域的緊張も低下します。非核兵器地帯ですべてが解決するとは言えませんが、相互不信と緊張のサイクルから相互信頼と緊張緩和のサイクルに転換する重要な第一歩になると確信します。

このような理論と信念から、韓国の市民団体とも協力しながら、私たちは「モデル東北アジア非核兵器地帯条約（案）」を作成し、この考えを広める活動に精力的に取り組んで参りました。日本語、韓国語、英語でモデル条約案やその解説をはじめ、さまざまな印刷物を出版しました。日本、韓国、中国で多くのシンポジウムやセミナーを開催しました。ニューヨークやジュネーブの国連本部、メキシコシティでの非核地帯条約加盟国会議などで、NGO（非政府組織）として外交官や政府代表を対象に訴えを行いました。日本にも韓国にも超党派の核軍縮議員ネットワーク（PNND）が存在しますが、その議員たちに検討を働きかけました。このような、活動を通して私たちの努力は、多くの国のNGOに知られ、各国の市民社会における支援が広がっています。

この構想の実現には、まず6か国のうちの一つでも、政府がこれを政策として取り上げることが節目の一歩となります。韓国政府か、日本政府が、あるいはその両方が、名誉ある最初の政府として立ち上がることを期待しています。そのために、私たちの奮闘は続きます。

今回の受賞は、私たちへの大きな励ましであるとともに、韓国の友人との絆を強め、国境を越えた新しい活動の広がりの契機となることと信じます。改めて、心から授賞に感謝いたします。（終）

チョロン（鉄原）平和展望台で、非武装地帯を背に。左から江原道観光政策課のファン・ジュンスク（黄貞淑）さん、梅林宏道、塚田晋一郎。ファンさんは、滞在中の付き添い案内人。（07年11月29日）

チョロン（鉄原）平和展望台より見た非武装地帯（DMZ）。韓国側監視塔の向こうに2重の鉄条網が張り巡らされている。（2007年11月29日。撮影：塚田晋一郎）

飲みながら談笑。この日一日、梅林にはずっと日韓の通訳が付いてくれた。大統領選の話題があり知事はハンナラ党と判明。その後、式会場へ。

授与式は郡庁の大ホールで行われ、報道陣や授賞関係者を含め約200人の参加があった。10時30分から授与式が行われ、受賞者3人がステージに並んで座り、知事、江原日報社長、郡主、江原大学学長、江原開発研究所長、統一相の祝辞が続いた。知事はピースデポの受賞について「日本の市民グループ・ピースデポは、アジア太平洋における非核化運動でイニシャチブを発揮し、顕著な業績を成し遂げたことに対し、特別賞をもって顕彰されます」と述べた。その後、知事と江原日報社長が大賞から順に賞を授与。刻まれた文を読み上げて表彰盾を渡し、賞金（現金）の入った封筒を渡し、花束が渡された。大賞は1000万ウォン、学術賞と特別賞は500万ウォン。税金を引いた残が手渡された。

続いてメスキタ教授が記念講演。その後、クォン氏、梅林が受賞挨拶（梅林の受賞スピーチは2、3ページ）。梅林は挨拶の後、道知事と江原日報社長にピースデポの出版物一式に木村宥子さんのカレンダーを添えて贈呈した。続いて地元議員（ハンナラ党）が挨拶。その後、乾杯に続いて立食パーティとなった。昼休みには江原道と鉄原の広報ビデオ上映があり、午後2時からシンポジウム、統一研究所の統一政策についての基調報告があった後、梅林代表が「東北アジア非核兵器地帯の意義」の問題提起を行った。

問題提起の後、梅林、メスキタのチームは鉄原平和展望台からのDMZ見学ツアーへ。事前許可制の展望台があり、そこは江原道の一つの観光資源になっていた。軍事境界線（非武装線）から南北2kmのDMZがよく見渡せ、さまざまな感慨が沸き起こった。夕方5時頃、車でソウルへと帰途についた。

ピースデポの事務所にはいま表彰盾が飾られている。これは、「東北アジア非核兵器地帯」設立への私たちへの励ましの盾である。事務所に立ち寄った際にはぜひ見ていただきたい。（塚田晋一郎、梅林宏道）

謝辞：大畑正姫さん、大畑龍次さん、イ・リョンギョン（李昤京）さんに、韓国語資料の収集や翻訳でたいへんお世話になりました。心から感謝いたします。

江原道観光政策課発表（2007年11月27日）報道資料　（抜粋訳）

第3回「DMZ平和賞」授賞式開催、平和運動家たち、チョロン（鉄原）の冷気を溶かす

――大賞に「（社）南北子ども仲良し会」、学術研究部門優秀賞に世界的碩学の米ニューヨーク大メスキタ教授、特別賞に日本のピースデポが受賞――

DMZ平和賞について

去る2005年に初めて制定されたDMZ平和賞は、DMZの価値および意味と世界平和の象徴としての役割などに新たに注目し、世界唯一の分断道である江原道の平和を実現しようとする意志を明らかにするために作られた。第1回DMZ平和賞には大賞に張イク司教（カトリック春川（チュンチョン）教区長）、特別賞にはダグ・ハマーショルド元国連事務総長が選ばれた。また、昨年の第2回DMZ平和賞では、大賞にドイツのハンスイデル財団、交流協力部門賞に平和財団、学術部門賞にハンリム大学のキム・チェハン教授が選ばれた。

ピースデポの受賞について

特別賞を受賞したピースデポは、平和問題に関する体系的な情報収集、調査研究、特にアジア太平洋地域における非核化運動を推進している市民団体である。ピースデポは、核軍縮、脱軍備をめざす研究および情報の発信源として、日本社会で「平和インフラ」を構築していくなど、これまで日本になかった独特な役割を果たしている。

特別賞　ピースデポ（代表：梅林宏道）
アジア太平洋地域における非核化運動を主導している市民団体（98年1月発足）
●主要な活動
①核廃棄の世論作りなど、「核兵器・核実験モニター」発刊
②核軍縮議員ネットワーク（PNND）のサポート
③平和運動家及び研究者の海外派遣など
＊梅林宏道（1937年生まれ）　太平洋軍備撤廃運動国際コーディネーター、軍縮議員ネットワーク東アジアコーディネーター